

Title	鷺見洋一教授 略年譜・著作目録
Sub Title	Bibliographical resume list of publications of Professor Yoichi Sumi
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.3 (2006. 12) ,p.I- XXII
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鷺見洋一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910003--004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鷺見洋一教授
略年譜・著作目録

経巡る季節 — 夏、秋、冬から春へ —

以下の自伝風年譜は、「人生三〇年周期説」および「人生階梯説」に即して記述されている。「人生三〇年周期説」とは何か。あらゆる人間は春夏秋冬の巡りに合わせて、それぞれの生を全うしている。すなわち、三〇年を単位とするある季節の下に途中で生まれ、さらに二つか三つの季節を経て、死を迎えるという俗説である。四つの季節を合わせると一二〇年になるので、全部を生きることでできる人はまずいない。だが、面白いほど私の人生に当てはまるので、以下の物差しを採用する。むろん、冗談半分である。

もう一つの「人生階梯説」は、こういうストーリーになる。人間は生まれ落ちると赤ん坊、ついで幼児期、少年（少女）期、思春期、青春期、成人期、初老期、老年期を経て死に至る。ところで、日本人の半分を占める日本女性は、世界標準なみの速度で成長し、歳を取っていくが、日本男性は恐らく世界で一番成長が遅く、いつまでたっても大人にならないという説である。赤ん坊でいる期間は女性と同じだが、私の見るところ、幼児期が長く、二〇歳まで。少年期が終わるのが二九歳。思春期が三〇代で、青春が四〇代。たとえば、二〇代で結婚する男がいるが、数歳年下の連れ合いが自分よりも幼いと思つたらとんでもない話で、「少年」が自分の母親と結婚するようなものなのである。思春期は「恋に恋する」だけの時期で、愛や異性などまったく理解できない。本当に異性を愛せるようになる四〇代の青春期を迎えたときは、もう家庭があり、子供がいるという悲惨な状況なのだ。五〇歳でやっと成人になるが、これは生物として成人しただけで、いわゆる酸いも甘いも噛み分けた「中年」ではない。日本人男性は「中年」を知らずに、子供のま

ま、気が付くと六〇歳で初老を迎える。後は死ぬだけである。この私も例外ではない。

一九四一年二月

東京、中目黒に生まれる。「夏」八年目の赤ん坊だった。四人兄弟の長男である。父はヴァイ

一日

オリニスト、母はピアノニストで、父方の親戚に音楽家が多い環境で育った。五歳で母からピアノを習い始めるが、絶対音といい、指の回転といい、二歳下の妹の才能にかなわず、及び腰だった。

一九四八年九月

「幼児」のままで慶應義塾幼稚舎入学。入試面接で「お父さんの時計を借りてなくしました。

どうしますか」と訊かれ、「また買います」という「幼児」の答えで、補欠になった。半年間、区立中目黒小学校に通い、スタイルのいい担任の山崎先生に「幼児」の初恋をした。秋から幼稚舎に補欠入学。六年間、ピアノよりも絵に熱中し、光風会会員の牧野司郎先生から油絵や木のデッサンなど基本を学んだ。ピアノはいつの間にか、情性で弾く程度にトーンダウンしていった。

一九五四年三月

慶應義塾幼稚舎卒業。

一九五四年四月

慶應義塾普通部入学。故安川国雄先生と意気投合して相撲部を創立。小兵ながら、はず押しを得意にした。体格がないので、負けの方が多いのは当然である。だが、楽しかった。また、香山芳久先生の「ぶどうの会」で下手な詩を書いた。絵は続けており、秋の労作展に連続して出品。また、三年生の時は、「スミヨイチ全集」と題する作品集を出して、ロシアの作家かと

訝られもした。生意気な、恐いもの知らずの「夏」の幼児中学生だった。

一九五七年三月

慶應義塾普通部卒業。

一九五七年四月

慶應義塾高等学校入学。絵を断念。写生以外にも「現代芸術」なるものがあるのに、自分は写真のようにしか描けない悩みで行き詰まったもの。かわって本格的に音楽が好きになり、オーボエをやりたくなつたが、オーケストラでヴァイオリンを弾いていた父から、オーボエは若い内は肺に負担がかかるからやめると反対され、泣く泣く断念。だが、レコードを聴くだけでは物足りず、芸大楽理の大学院に行っていた従兄の故渡部恵一郎からピアノと音楽理論を習う。とりわけ整然として数学的な美を湛えた和声学の魅力の虜となった。ピアノは、すでにプロを目指していた妹から馬鹿にされながら、何とか続ける。二年生の時から、近所の女性にフランス語を習い始める。動機は忘れた。ネイティヴ並みに発音がきれいな先生だったが、文法がまるで駄目だった。高校三年次で第二語学を選ぶとき、欲張ってドイツ語にしたのが、後で祟ることになる。

一九六〇年三月

慶應義塾高等学校卒業。

一九六〇年四月

慶應義塾大学文学部入学。折しも安保闘争の渦中で、訳も分からずにデモに参加したりする。周囲に左翼の友人が多かった。皆「幼児」の左翼である。早くもフランス文学専攻を志望していたが、高校でのドイツ語が災いして、一年次で自動的にドイツ語のクラスに入れられてしまった。同級に柴田陽弘をはじめ、ドイツ語系の秀才が沢山いた。むろん「幼児秀才」。当時、

フランス文学専攻は人気抜群で、選考試験があり、会話ばかりやってきた語学力では、文法が弱く、合格がおぼつかなかったもので、法学部の二宮孝顕先生にお願いして、一年間、初等文法の授業を聴講させて頂いた。

一九六一年四月

慶應義塾大学文学部フランス文学専攻に進学。同級に立仙順朗がいた。教授スタッフは、佐藤朔、白井浩司、大浜甫先生を中心に、松原秀一、若林真、高島正明、さらに若手の高山鉄男、古屋健三、永井且など錚々たる面々。松原先生が留学から帰国された数日後の教室にいた。「鷲見君、バロックとはどういう意味ですか」と訊かれ、「バロックはバロックだなあ」と呟いたらしい。先生は「歪んだ真珠」という語源のポルトガル語を期待したのだが、長い留学で、幼児のような日本の大学二年生の教養や実力を測定しこなわれたのである。

岩波文庫のデイドロ『ラモーの甥』に魅せられ、一八世紀を勉強する気になる。サルトル、カミュを中心とした現代フランス文学が売りだった専攻なので、この選択はかなりの響響を買った。周囲は、今にして思えば将来恐るべき小説家や詩人の卵が蝟集しており、フランス文学専攻の黄金時代だった。一九六二年、私の運命の季節は「夏」から「秋」に移る。途端に写真写りが悪くなり、どこか存在そのものが霞み始める。「幼児期」を卒業して、「少年期」に移行した時期でもあった。

一九六四年三月

慶應義塾大学文学部文学科フランス文学専攻卒業。

一九六四年四月

慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程フランス文学専攻に入学。引き続き、デイドロを勉

一九六六年三月

強する。折しも、デイドロ再評価の機運が世界的に高まっていたので、参考文献には事欠かず、運がよかった。研究史的には、戦後の一八世紀研究を席巻したマルクス主義の洗礼を浴び損なつた第一世代に属する。

慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程フランス文学専攻、文学修士の学位取得。「少年」でかちとつた貴重な学位である。

一九六六年四月

慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程フランス文学専攻に入学。この頃、モンペリエ大学の碩学ジャック・プールの学位論文『デイドロと百科全書』を読んで感動し、この人の指導で本格的にソルボンヌ流実証研究を勉強をしたいと思います、フランス政府給費留学生試験を受けるために、東京日仏学院に通う。パンゲ先生、ブロック先生という伝説の名教師の警咳に接した。周囲にも、「少年」臭や「幼児」臭が抜けきらない仏文秀才たちが沢山いた。

一九六七年九月

フランス政府給費留学生としてフランス、モンペリエ大学文学部博士課程に入学。一年先輩に早稲田の市川慎一、同期に東大の原好男、白井泰隆がいた。皆、立派な「少年」たちである。指導教授ジャック・プールのとは初対面から意気投合したが、驚いたのは、教授が日本で想像していたようなガチガチのソルボンヌ風実証主義者ではなく、新批評やミシェル・フーコーにも深い関心を寄せているということだった。恩師の複雑な人格や学問の奥深さに魅せられ、師弟の関係が、いつしか深い友情で結ばれた親交に発展。教授は日本に関心を持ち、何度かの来日をされ、ついに日本について三冊の書物まで刊行する。二〇〇五年九月に享年七九歳で逝

去。

一九七二年三月

モンペリエ大学にて博士号取得、帰国。ちょうど「少年期」を脱して、「思春期」に入る。愚かにも思春期の分際で、六歳下の女性と結婚するが、徐々に向こうの方がはるかに精神年齢は上だと痛感させられる。それを自覚できただけでもまじだと思ふ。

一九七三年四月

慶應義塾大学文学部助手。見回すと、周囲には数知れない「幼児」、「少年」、「青年」の同僚がおり、「成人」はわずかだった。

一九七四年三月

慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程フランス文学専攻単位修得満期退学。

一九七五年四月

慶應義塾大学文学部助教授。「思春期」の助教授だった。

「秋」の季節で大きな変化は、文学部長補佐を二回務めたこと。まず、三雲夏生先生の第二期目。ついで、小谷津孝明先生の第一期目。学部長室にのべ四年も詰めていると、学部や大学中枢の動きや事情はあらかじめ読めるようになる。その結果、執行部と呼ばれる人々のお手伝いは出来ても、自分がその仲間になってキャンパス行政を担当する能力も資格もないという確信を得た。それ以来、その種のあらゆる誘いを断り続けた。「思春期」にしては賢い振る舞いだった。

一九八二年八月

やっと「青春期」に入る。大学から福澤基金を頂き、フランス、パリ第七大学留学。久しぶりのフランスで、恩師や旧友との再会を楽しんだ。この間、国立図書館に通って調査し続けた研究テーマは、なぜかまったく活字にしておらず、「秋」や「冬」を忌避して、「春」（というこ

とは八〇歳代)に開花するように設定されているらしい。

一九八四年四月

帰国。復刊『三田文学』の理事会に呼び出され、会計担当理事を仰せつかる。複式簿記なるものを学習した。編集室で、これまで未知だった小説家や詩人や批評家たちと、柄にもなく付き合う羽目になる。普通であれば、大学時代に卒業しているはずの「文学的青春」期だった。

一九八五年四月

「青春期」の真つ盛りで慶應義塾大学文学部教授。

一九八八年四月

「成人期」にあと三年というところで、慶應義塾大学大学院文学研究科委員。成人になった途端、季節が「秋」から「冬」に変わり、以後三〇年間の暗く寒い生活を運命付けられる。景気づけにイタリアへの留学を本格的に考え始め、サバチカル・イヤーの申請が通る。慶應外国語学校で二年間、夫婦で席を並べてイタリア語を学ぶ。だが、冬の季節は残酷で、早速、癌にかかり、手術、放射線とひどい目に遭い、体力、氣力を失う。身内の紹介で漢方薬の凄さを知り、やっと元氣が出る。

一九九三年四月

イタリア、ボローニャ大学留学。悪性腫瘍の予後としては最高の選択だった。フランスが実はあまり馴染めず、密かに憧れていたルネッサンスの故国に毎日感動し、文字通り「復活」した。これで「成人」になれたのである。冬の季節の最高の収穫である。

一九九四年三月

イタリアから帰国。創設された大学アート・センターに加わって、前田富士男、美山良夫といった塾内の「芸術派」と隊伍を組む。

一九九五年一〇月

慶應義塾大学アート・センター所長就任。門前の小僧で、おびただしい現代芸術情報を満身に

二〇〇三年九月

浴びる。途中から、湘南藤沢キャンパスで展開しはじめた慶應義塾大学最初のCOE（研究代表者齋藤信男先生）に、三田キャンパスから唯一参加を許され、土方巽らを中心とした現代アートのアーカイヴを、アート・センター内部に創設した。その後、副所長の前田富士男と組んで、数知れない外部資金をアーカイヴ運営のために申請し、論文よりも申請書や企画書の作文だけは一流の腕前になった。研究者として自慢できる話ではない。

慶應義塾大学アート・センター所長退任。この頃から現在まで、どちらかというと文学部の外で、慶應義塾大学に与えられる外部資金を使って展開する研究プロジェクトと関わるが多くなつた。HUMI、DRM、ORC、DMCなど、文化財のデジタル化を目指す共同研究が多く、パソコンの操作や技術について、若い人から教わるが増える。新潟大学の逸見龍生、一橋大学の小関武史らの若手と語らって、『百科全書』バリ版の本格的なメタデータ抽出作業にかかる。目も眩むような難事業である。全国に散らばる二五名の一八世紀研究者がヴォランティアで協力してくれ、これがある種生き甲斐のようなものになっている。

慶應義塾を定年退職予定。二〇二二年に八一歳で「春」を迎える時をひたすら楽しみに、それまでなんとか生き延びる覚悟でいる。

二〇〇七年三月

研究・業績

以下、自分で「研究業績」と考えるものだけをリストアップする。だが、ここに収録されなかった、夥しいエッセイやコラムや書評や雑文の数々に実は愛着があり、学術論文はかなり無理をして書いてきたという印象が強い。照れや韜晦ではなく、本気でそう思う。

著書

Le Neveu de Rameau : caprices et logiques du jeu, Librairie France Tosho, 1975, 520 p. (ポール・ヴァレリー大学博士論文)

『翻訳仏文法』(日本翻訳家養成センター、上巻 一九八五年、三六四頁、下巻 一九八七年、三八五頁)。

筑摩書房より復刊(ちくま学芸文庫、上巻 二〇〇三年、三八六頁、下巻 二〇〇三年、四一四頁)。

『理性の夢』図版と文字で読むフランス18世紀』[日本橋丸善における展示目録の監修と執筆](慶應義塾大学図書館)、

一九九五年一月、一三三頁。

『繁殖する自然 博物図鑑の世界』[日本橋丸善における展示目録の監修と執筆](慶應義塾大学図書館)、二〇〇三年一月、二二二頁。

共著・編著・教科書

饗庭孝男・朝比奈誼・加藤民男編『フランス文学史』〔共著〕（白水社、一九七九年）。

デイドロ『ド・ラ・カルリエール夫人事件』〔フランス語教科書〕（白水社、一九八六年）。

海老沢敏・佐々木健一・柴田南雄・鷲見洋一編『モーツァルト』全四巻〔共同監修〕（岩波書店、一九九一年）。

Ici et ailleurs : le dix-huitième siècle au présent. Mélanges offerts à Jacques Proust. Textes recueillis et publiés par Hisayasu

Nakagawa, Shin-ichi Ichikawa, Yoichi Sumi, Jun Okami. Le Comité Coordinateur des Mélanges Jacques Proust, 1996.

週刊百科「世界の文学」第五号 ヨーロッパ「サド、デイドロ、ラクロほか エロスと理性」〔責任編集と執筆〕（朝日

新聞社、一九九九年八月一五日）、三四頁。

Thématique et rêve d'un éternel globe-trotter. Mélanges offerts à Shin-ichi Ichikawa. Textes recueillis et publiés par Shiro Fujii,

Yoichi Sumi, Sakae Tada. Le Comité Coordinateur des Mélanges Shin-ichi Ichikawa, Tokyo, 2003.

科研費報告書など

「デジタルメディアの哲学と理論」、『創造的デジタルメディアの基礎と応用に関する研究 平成八年度科学研究費

補助金（COE形成基礎研究費）研究報告書」、慶應義塾大学SFC研究所／デジタルメディア基盤・応用研究セ

ンター、一九九七年六月、三七—四六頁。

「ユマニズムとその彼岸——芸術・文化・教育をめぐるコラボレーション」、前掲書、四六五—四七〇頁。

『18世紀フランスにおける「侵犯」と「異界」——図像と文字によるテーマ系の研究——』、平成八年度～平成一〇年度
科学研究費補助金（基礎研究C） 研究成果報告書、一九九八年六月。

「デジタルメディアの哲学と理論2——アーカイヴ構築の提言」、『創造的デジタルメディアの基礎と応用に関する
研究 平成九年度科学研究費補助金（COE形成基礎研究費） 研究報告書』慶應義塾大学SFC研究所／デジタル
メディア基盤・応用研究センター、一九九八年六月、一七一—一九頁。

「ユマニズムとその彼岸——芸術・文化・教育をめぐるコラボレーション 慶應義塾大学博物誌資料コレクション」、前掲
書、四〇七—四〇九頁。

「ユマニズムとその彼岸——芸術・文化・教育をめぐるコラボレーション」、前掲書、四六五—四七〇頁。

「ジェネティク・アーカイヴ・エンジン」、『創造的デジタルメディアの基礎と応用に関する研究 平成一一年度科
学研究費補助金（COE形成基礎研究費） 研究報告書』、慶應義塾大学SFC研究所／デジタルメディア基盤・応
用研究センター、一九九九年六月、二七九—三〇三頁。

「ジェネティク・アーカイヴ・エンジン」、『創造的デジタルメディアの基礎と応用に関する研究 平成一一年度科
学研究費補助金（COE形成基礎研究費） 研究報告書』、慶應義塾大学SFC研究所／デジタルメディア基盤・応
用研究センター、二〇〇〇年六月、三八三—三九一頁。

「デジタル・メディアの哲学と理論」、『創造的デジタルメディアの基礎と応用に関する研究 平成一二年
度科学研究費補助金（COE形成基礎研究費） 研究報告書・最終成果報告書』、慶應義塾大学SFC研究所／デジタルメ
ディア基盤・応用研究センター、二〇〇一年六月、二一七—二一七—三。

『フランス『百科全書』研究——本文と図版への多角的接近——』、平成二一年度～一四年度科学研究費補助金(基礎研究C) 研究成果報告書、二〇〇二年六月。

『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン』、『創造的デジタルメディアの基礎と応用に関する研究 平成二二年度科学研究費補助金(COE形成基礎研究費) 研究報告書・最終成果報告書』慶應義塾大学SFC研究所/デジタルメディア基盤・応用研究センター、二〇〇二年六月、三二～三九一～三三二～一六。

『慶應義塾大学デジタル・コンテンツ研究運用機構 報告書(二〇〇二～二〇〇二)』[監修および執筆]「序論」と「展望」、各章の「摘要と注釈」(慶應義塾大学デジタル・コンテンツ研究運用機構)、二〇〇二年一二月、一五〇頁。

『慶應義塾大学デジタル・コンテンツ研究運用機構 報告書(二〇〇二～二〇〇四)』[監修および執筆] Keio Digital Content Research and Service Museum 二〇〇四年三月、五三頁。

『慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター 報告書(二〇〇一～二〇〇四)』[監修および執筆] Digital Archive Research Center 二〇〇四年三月、五二頁。

『近代博物誌の成立と展開——テキストと図版からの接近』、平成一五年度～一六年度科学研究費補助金(基礎研究C) 研究成果報告書、二〇〇四年六月。

『進化するアーカイヴ 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター 報告書(二〇〇一～二〇〇六)』[監修および執筆] Digital Archive Research Center 二〇〇六年三月、一三四頁。

翻訳書

ベルナル・シャルボノー『バビロンの庭』〔原好男と共訳〕（思索社、一九七四年）。

ピーター・ゲイ『自由の科学』全二巻〔中川久定、中川洋子、永見文雄、玉井道和と共訳〕（ミネルヴァ書房、一九八二年、一九八六年）。

ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』〔海保真夫と共訳〕（岩波書店、一九八六年）。

論文（フランス語ほか）

«Autour de l'image du jeu d'échecs chez l'auteur du *Neveu de Rameau*», in *Recherches nouvelles sur quelques écrivains des Lumières*, Droz, 1972, pp.341-363.

«Pensées détachées sur la <Poétique> — Une lecture du Prologue du *Neveu de Rameau* —», *The Geibun-Kenkyu, Journal of Art and Letters* (Edited and Published by Geibun-Gakkai, The Keio Society of Art and Letters, Keio University), n° 32, pp. 26-88.

«Diderot et les problèmes de déchiffrement des dehors», *Études de langue et littérature françaises*, n° 22, 1973, pp.73-85.

«Lire Diderot : à propos d'un passage du *Voyage en Hollande*», *Études de langue et littérature françaises*, n° 36, 1980, pp.51-65.

«L'Été 1762 — A propos des lettres à Sophie Volland», *Europe*, n° 661 (mai), 1984, pp.113-119.

«Traduire Diderot — style polype et style traduit», in *Colloque international Diderot*, Actes recueillis par Anne-Marie Chouillet, Paris, Aux Amateurs de livres, 1985, pp.255-260.

«Pour une nouvelle lecture du *Neveu de Rameau*», in *Diderot et le XVIII^e siècle en Europe et au Japon*. (Colloque franco-japonais de Kyoto — 19 ~ 23 novembre 1984) Actes recueillis par Hisayasu Nakagawa. Nagoya, Centre Kawai pour la culture et la

pédagogie, 1988, pp.47-55.

«Du bon usage du récit d'événement — production de la peur et de la sécurité», *Equinoxe* (Rinsen-Shoten), n° 4 : Révolution / Littérature, été 1989, pp. 103-132.

«Les journées d'octobre dans le fonds Bernstein» (coauteur), in *La Révolution française et la littérature*, Colloque international du bicentenaire 1789, présenté par Hisayasu Nakagawa, Presses Universitaires de Kyoto, 1992, pp.120-165.

«L'enfant prodige et le musicien raté — Mozart et le neveu de Rameau», in *Ici et ailleurs : le dix-huitième siècle au présent*, Mélanges offerts à Jacques Proust. Textes recueillis et publiés par Hisayasu Nakagawa, Shin-ichi Ichikawa, Yoichi Sumi, Jun Okami. Le Comité Coordinateur des Mélanges Jacques Proust, 1996, pp. 159-177.

«Quelques réflexions sur les journées d'octobre», *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, n° 348, Actes du neuvième congrès international des Lumières (n°s 346-348), Münster 23-29 juillet 1995, Voltaire Foundation, 1996, pp.1299-1301.

«Pour une esthétique de l'improvisation collective. Le cas de *haikai*, pratique poétique de Basho», *Etudes sur le XVIII^e siècle*, XXVI, <Topographie du plaisir sous la Régence>, éditées par les soins de Roland Mortier et Hervé Hasquin, 1998, Editions de l'Université de Bruxelles, pp.139-152.

«<Atmosphère> et <Atmosphère> — Essai sur la *Cyclopaedia* et le premier Prospectus de l'*Encyclopédie*», in *Vérité et littérature au XVIII^e siècle, Mélanges offerts en l'honneur de Raymond Trousson*, édité par Paul Aron, Sophie Basch, Manuel Couvreur, Jacques Marx, Eric Van der Schueren, Valérie van Cingten-André, 2001, Honoré Champion Editeur, pp.271-284.

«On Genetic Archives», in *Creative Digital Media : Its Impact on the New Century*, Keio University COE International Symposium

- December 4-5, 2000), Research Center for Digital Media Infrastructure and Application, Keio Research Institute at SFC, Keio University, 2001, pp.108-111.
- «Le Moulin dans les panoramas du monde», in *Le Travail des Lumières pour Georges Benrekassa*. Edité par Caroline Jacot Grapa, Nicole Jacques-Lefèvre, Yannick Sétif et Carine Trevisan, Honoré Champion Editeur, 2002, pp. 39-55.
- «De la *Cyclopaedia* à l'*Encyclopédie* — traduction et réécrite», *Sciences Musiques Lumières — Mélanges Anne-Marie Chouillet* publiés par Ulla Kølving et Irène Passeron, Centre international d'étude du XVIII^e siècle, Fernel-Voltaire, 2002, pp. 409-419.
- «Préface» à *Thématique et rêve d'un éternel globe-trotter*. Mélanges offerts à Shin-ichi Ichikawa. Textes recueillis et publiés par Shiro Fujii, Yoichi Sumi, Sakae Tada. Le Comité Coordinateur des Mélanges Shin-ichi Ichikawa, Tokyo, 2003, pp. i-vi.
- «Essai sur l'excédent — Comment revaloriser l'*Encyclopédie*?», *ibid.*, pp. 27-37.
- «Sur quatre figures d'absence dans l'œuvre de Diderot», in *Le XVIII^e siècle Histoire, Mémoire et Rêve. Mélanges offerts à Jean Goulemot*. Sous la direction de Didier Masséau. Honoré Champion Editeur, 2006, pp. 173-182.

論文 (日本語)

- 「ディドロにおける演技の問題」、『日本フランス語フランス文学研究』第九号、一九六六年、二六—三二頁。
- 「モンペリエ」、『地域開発情報システム』——参考資料4——(通商産業省大臣官房情報管理課 政策情報システム開発室)、一九七三年、六三—九四頁。
- 「解題」、『フランス官報とバリ・コミュニケーション展目録』(慶應義塾大学三田情報センター、慶應義塾経済学会)、一九七五

年、二九一四〇頁。

「文明批判、社会批判、政治の原理」、「フランス文学講座」、第五卷「思想」（大修館書店）、一九七七年、二八六—三一
二頁。

「二つの死——一七七八年の状況とルソー、ヴォルテール」、「思想」（岩波書店）、一九七八年七月号、四—四七頁。

「美味の探求と〈大食〉願望」、「くりま」秋季号第七号、一九八一年一〇月、一六七—一七四頁。

「ソフィー・ヴォラン書簡を読む」、「思想」（岩波書店）、一九八四年一〇月号、六六—八六頁。

「整合と惑乱——フランス『百科全書』の図版」、「月刊百科」（平凡社）、第二六七卷・第一号、一九八五年、三七—四
二頁。

「デイドロの『マダム・ド・ラ・カルリエール』を読む」、「藝文研究」（慶應義塾大学文学部文学科紀要）、第四八号、
一九八六年三月号、二二五—二四七頁。

「共時性の研究」、「學鏡」（丸善）、第八三卷・第一一號、一九八六年、二八—三二頁。

「ヴェルサイユ行進の新聞報道」、「學鏡」（丸善）、第八五卷・第九号、一九八八年、四八—五一頁。

「放蕩と処罰——ドン・ファン論」、「三田文学」、第二〇号、一九九〇年冬季号、一一六—一四九頁。

「宮廷風俗とサロン——国王神話の舞台」、「世界の歴史」（朝日週刊百科）、第八二号「宮廷とアカデミー」、朝日新聞社、
一九九〇年六月二四日、五二—五二六頁。

「議事録の虚実——10月事件論序説」、「藝文研究」（慶應義塾大学文学部文学科紀要）、第五九号、一九九一年三月、（二二

七）—（三三九）頁。

- 「モーツァルトの時代を読む——音楽家のいない文献案内——」（共著）、『文学』第二卷・第四号、一九九一年秋、一三〇—一七〇頁。
- 「喪失と自由」——1778年パリ」、『モーツァルト』、I「人間モーツァルト」、岩波書店、一九九一年、一八九—二一四頁。
- 「国王さまごま——1791年の周辺」、『モーツァルト』、II「歴史の中のモーツァルト」、岩波書店、一九九一年、四五—六一頁。
- 「怪物的神童とパリ」——1763—64年の滞在」、『モーツァルト』、II「歴史の中のモーツァルト」、岩波書店、一九九一年、一二七—一五二頁。
- 「文献案内」（共著）、『モーツァルト』全四卷（岩波書店）、一九九一年、四〇頁。
- 「奇人と天才の出会い——モーツァルトと世紀末」、『モーツァルト全集』（小学館）、第一三卷、一九九二年、六六一—六六頁。
- 「ふたつの国内旅行——デイドロとメネトラの紀行文」、『藝文研究』（慶應義塾大学文学部文学科紀要）、第六三号、一九九三年三月、（二三四）—（二四七）頁。
- 「『閨房哲学』における開と閉」、『文学』、第五卷・第四号、一九九四年秋、二一—一七頁。
- 「理性の夢——フランス18世紀のテーマ系——」、『藝文研究』（慶應義塾大学文学部文学科紀要）、第六七号、一九九五年三月、一九一—二〇一頁。
- 「理性の夢——図版と文字で読むフランス一八世紀」、『學鑑』（丸善）、第九二卷・第一号、一九九五年、二〇—三〇頁。

「記録・分類・啓蒙——フランス百科全書をめぐって」、『レコード・マネジメント』、第三二号、一九九六年大会特集、一九九六年一〇月号、一一—一二頁。

「これは書評ではない——水林章の二冊の書物をめぐって」、『文学』、第八巻・第二号、一九九七年春、一六一—一七九頁。

「一八世紀の夢——気球の旅」、宮崎揚弘編『ヨーロッパ世界と旅』（法政大学出版局）、一九九七年六月、三二—三四六頁。

「博物誌コレクションのデジタル化」、Keio Consortium for Digital Research Library 初年度活動報告書（慶應義塾大学）、一九九七年二月、三八—四二頁。

「死んでいる女、不在の女——脅迫状、恋愛小説、そして恋文へ」、『三田文学』（慶應義塾大学三田文学会）、第五四号、一九九八年夏季号、五八—六八頁。

「談話文化の18世紀」、『フランス哲学・思想事典』（弘文堂）、一九九九年、一七五—一七七頁。

「『百科全書』第一趣意書の重要性——チェンバーズ問題解明のために」、『藝文研究』（慶應義塾大学文学部文学科紀要）、第七七号、一九九九年、（二五二）—（二六七）頁。

「デジタル・メディア時代の書物と書物研究」、『文学』（岩波書店）、第一巻・第一号、二〇〇〇年、一五九—一六一頁。

「世界図絵の中の水車」、『自然と文学——環境論の視座から』柴田陽弘編著、慶應義塾大学出版会、二〇〇一年、一一—一六二頁。

「アーカイヴの中の記憶術と博物図鑑」、『トランスコミュニケーション——新ミレニアムへの変容——』、（SFCフォーラ

ム・ファイル5、SFCフォーラム事務局編集 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス)、二〇〇一年、一七四—一九一頁。

「18世紀における外国および外国人の表象」のためのテーマ粗描——西ヨーロッパを中心に——」、「日本18世紀学会年報」、第一六号、二〇〇一年六月、一九—二二頁。

「フランス近代小説論——取捨選択のドラマ」、小森陽一、富山多佳夫、沼野充義、兵藤裕己、松浦寿輝編、岩波講座『文学3 物語から小説へ』(岩波書店)、二〇〇二年、一〇五—一三一頁。

「解説 カッシーラーの啓蒙研究と現代」、エルンスト・カッシーラー『啓蒙主義の哲学 下』(中野好之訳、ちくま学芸文庫)、二〇〇三年、二八四—三二〇頁。

「デイドロとドイツ——ゲーテのデイドロ読解を中心に」、「モルフオロギア ゲーテと自然科学』(ゲーテ自然科学の集い)、特集「ゲーテとフランス啓蒙思想」、二〇〇三年、第二五号、二八—四九頁。

「丸善展を終えて——アーカイヴまたは文化装置としての博物図鑑考」、「MediaNet』慶應義塾大学メディアセンター、第一〇号、二〇〇三年、五四—五七頁。

「過剰・集積論——記憶術、ベークン、『百科全書』、そしてアーカイヴ——」、「芸術のロケーション』(慶應義塾大学アート・センター/ブックレット12)、二〇〇四年一月三二日、四三—五六頁。

「下河辺淳アーカイヴの意義——個人記憶装置の可能性」、「NIRA 政策研究』(総合研究開発機構)、第一七卷・第二号、二〇〇四年二月二五日、五〇—五三頁。

「バルナール・シャルボノー(一九一九—一九九六) その生涯と思想』(「地球環境問題を語る——3分間スピーチ大会」

参考資料)、慶應義塾大学アート・センター主催、二〇〇五年四月一九日・二〇日、一六頁。

『百科全書』研究の現在——懐古と展望——、『藝文研究』(慶應義塾大学文学部文学科紀要)、第八九号、二〇〇五年
一二月、二八三—二六九頁。